

ラオディキア - ナンバー・ツー

プロテスタントのホルン

Jeff Pippenger

2023-08-27

黙示録で封印が解かれつつあるメッセージを理解するうえで、プロテスタント宗教改革の起源、発展、そして意義を認識することは不可欠である。その宗教改革の歴史には三つの主要な流れがあり、聖書そのもの、聖書を研究するために用いるべき正しい方法論、そしてその歴史を通じて選ばれた使者たちがその歴史の道標であること、の三点を扱っている。いつものことながら、サタンは幾つもの偽物によって欽定訳聖書を隠そうとし、また聖書を理解するための正しい方法論を幾つもの偽物で覆い隠そうとし、さらに、その歴史の途上で立てられた正しい使者（道標）さえも隠そうとした。

しかしサタンは手をこまねいてはいなかった。彼は今、他のあらゆる改革運動で常に企ててきたこと、すなわち真の働きの代わりに偽物を押し付けて人々を欺き、滅ぼすことを試みた。キリスト教会の第一世紀に偽キリストがいたように、十六世紀には偽預言者が現れた。『大いなる論争』186。

1840年から1844年にかけてのミラー派の歴史において、プロテスタント（アメリカ合衆国を指す地の獣の二本の角の一つ）の衣鉢をミラー派アドベンティズムが受け継ぎ、プロテスタントの角となった。同時に、これまで自らをプロテスタントと称してきた諸教会は背教的プロテスタントとなり、ミラー派の呼び方では「ローマの娘たち」とされた。1843年にプロテスタントが第一天使のメッセージを拒んだとき、彼らは倒れ、ミラー派はプロテスタントの衣鉢を担って前進した。ミラー派の歴史は、神の「荒野の教会」を神の御言葉の完全な理解へと導き上げるといふ、神の働きの頂点であった。

調査審判の開始は、神の律法、特に安息日に関する試金石をもたらした。第三天使の使信を宣べ伝えるには、暗黒時代に教皇制の伝統と慣習の下に葬られていた神の律法を堅く守る教会が必要であった。キリストはプロテスタントを1840年から1844年の歴史へと導き、エリヤの試金石を提示した。ウィリアム・ミラーはこのエリヤに型どられていた。そしてプロテスタントがミラーのメッセージを退けたとき、彼らはローマへ戻った。ミラーが宣べ伝えた第一天使の使信の試金石は、カルメル山のエリヤによって型どられていた。

そしてエリヤはすべての民に近づいて言った。「いつまであなたがたは二つの意見の間でどっちつかずでいるのか。もし主が神であるなら、主に従え。だが、もしバアルなら、彼に従え。」しかし民は彼に一言も答えなかった。列王記上 18:21

1840年、ミラーと第一の天使に体現されたエリヤのメッセージに直面したとき、プロテスタントはバアルを選んだ！

プロテスタント宗教改革は、テアテラの教会によって象徴される歴史の間に与えられると約束された「明けの明星」によって始まった、聖書の真理の封印が解かれる出来事であった。聖書に対する直接的な攻撃はそれより何世紀も前に始まっており、その事実は『The Great Controversy』、とりわけワルドー派の歴史において明確に示されている。193

0年、ベンジャミン・ウィルカーソンは『Our Authorized Bible Vindicated』を出版した。この書は、最終的に欽定訳聖書の翻訳に用いられた聖なる原典に対する戦いと、カトリック、背教したプロテスタント、そしてラオデキア的なアドベンチストによって当時も今も推進されている様々なサタンの偽作本文について、詳述している。その戦いはワルド一派の歴史よりもはるか以前に始まっていたが、彼らは、最終的に1611年の欽定訳聖書へと翻訳された正しい写本の重要性を証しするために命を捧げた人々の道標であり象徴である。

1611年の欽定訳聖書（キング・ジェームズ版）の制作は、厳密に定められた翻訳手順を経て行われた。聖書の翻訳と刊行の過程は、7つの工程を通して成し遂げられた。それは完成までに7年を要し、聖書における年の数え方では7年は2,520日に当たる。これはもちろん、ダニエル書9章の成就として、イエスが多くの者と契約を確証されたとされる預言的な日数と同じである。その聖なる一週の中真ん中でキリストは十字架にかけられ、そしてもちろん、十字架につけられたキリストこそ聖書の中心である。神の純粋な御言葉を生み出すための7つの段階は次のとおりである。

- ・ 第一：個々の訳者による初期翻訳：約50人の訳者が6つの委員会に分けられ、それぞれが聖書の異なる部分を担当した。これらの訳者は、原語（ヘブライ語、アラム語、ギリシア語）から英語への翻訳に取り組んだ。
- ・ 第二：委員会によるレビュー：各委員会が担当セクションの翻訳を完了した後、その作業は委員会のメンバー自身によって見直された。これにより、意見を持ち寄って検討し、誤りを修正することができた。
- ・ 第三：総合委員会による審査。各委員会の個別訳は、その後「総合委員会」と呼ばれるより大規模な学者グループに提出された。この委員会は、六つの翻訳委員会それぞれの代表者で構成されていた。彼らは全体の翻訳を見直し、各委員会の訳文を比較して調整・統一した。
- ・ 第四：追加の審査と改訂：総委員会の改訂版は、さらなる審査と改善のために各委員会に差し戻された。この反復的なプロセスは、訳文の一貫性と正確性を確保するのに役立った。
- ・ 第五：最終審査および承認：各委員会が修正を完了した後、最終案は最終審査および承認のために総合委員会に提出された。
- ・ 第六：王室の承認と出版：承認された翻訳は、その後、ジェームズ一世の承認を得るために提出された。
- ・ 第七に：国王の承認が得られると、その翻訳は1611年に聖書のキング・ジェームズ版（欽定訳）として出版された。

主のことばは純粋なことば。土の炉で試され、七度きよめられた銀のようだ。主よ、あなたはそれらを守られ、この世代からとこしえにそれらを保たれる。詩篇 12:6,7

サタンが神の御言葉と、展開する歴史におけるさまざまな使者によって示され、また御言葉を正しく取り扱うための正しい方法論によっても示される道標に対して仕掛ける戦いにおいて、1611年の欽定訳聖書は、詩篇12篇において明確に特定されている道標である。腐敗したカトリックの写本から生み出されたさまざまな偽の聖書のいずれも、詩篇12

篇の基準を満たしていない。七つの段階を経た精練の過程と二千五百二十日の期間が、欽定訳聖書こそ神の「純粋な言葉」であることを示している。神は欽定訳聖書を永遠にご自身の純粋な御言葉として守ると約束しておられ、したがって、ウィリアム・ミラーを含むプロテスタントの改革者たちが用いた「歴史主義」の方法論を堅持することも約束しておられる。

十四世紀に、『The Great Controversy』という書物で「宗教改革の暁の明星」と称されるジョン・ウィクリフは、神に用いられて、聖書を一般の人々でも理解できる言語に翻訳した。彼は、プロテスタント宗教改革の始まりの道標を示す使者である。

ウィクリフが始めた偉大な運動は、良心と知性を解放し、長らくローマの凱旋車につなぎとめられていた諸国民を自由にするものであった。その源泉は聖書にあった。ここに、いのちの水のように十四世紀以来、世々を通じて流れ続けてきた祝福の流れの源があった。ウィクリフは、聖書を神の御旨の靈感による啓示、信仰と実践のための十分な規範として、全幅の信頼をもって受け入れた。彼は、ローマ教会を神的で無謬の権威と見なすよう教育され、千年にわたり確立された教えと慣習を、疑問を差し挟まぬ畏敬をもって受け入れるよう教えられていた。しかし彼は、これらすべてから背を向け、神の聖なる御言葉に耳を傾けた。彼が人々に認めるよう求めた権威は、これであった。教皇を通して語る教会ではなく、唯一真の権威は、その御言葉を通して語る神の御声であると彼は宣言した。さらに彼は、聖書は神の御旨の完全な啓示であるばかりか、その唯一の解釈者は聖霊であり、だれもがその教えを学ぶことによって自らの務めを自分で学ぶべきであると教えた。こうして彼は、人々の心を教皇とローマ教会から神の御言葉へと向けさせた。

ウィクリフは宗教改革者の中でも最も偉大な人物の一人であった。知性の幅広さ、思考の明晰さ、真理を堅持する確固たる意志、それを擁護する大胆さにおいて、彼に匹敵する者は後に続く者の中にもほとんどいなかった。生き方の清廉さ、学問と労働におけるたゆまぬ勤勉さ、いささかも腐敗に染まらぬ廉潔さ、そしてその奉仕におけるキリストのような愛と忠実さが、宗教改革者の先駆けである彼を特徴づけていた。しかも、彼が現れた時代は知的な暗闇と道徳的腐敗に覆われていたにもかかわらずである。

ウィクリフの人格は、聖書が持つ教育的で変革的な力の証しである。彼を彼たらしめたのは聖書であった。啓示の偉大な真理を把握しようと努めることは、あらゆる能力に新鮮さと活力を与える。それは知性を広げ、知覚を鋭くし、判断力を成熟させる。聖書の研究は、ほかのいかなる学びにもできない仕方、すべての思い、感情、志を高める。それは目的の確固さ、忍耐、勇気、不屈を与え、人格を洗練し、魂を聖める。真摯で敬虔な聖書研究は、学ぶ者の知性を無限の知性と直接に触れ合わせることによって、人間の哲学が提供する最も優れた訓練からこれまで生じたものをはるかに超えて、より強くより活動的な知性と、より高貴な原則を備えた人々を世界にもたらさざらう。詩篇記者は言う、「あなたの御言葉が入るとき、光を与え、悟りを与える」。詩篇119:130。『大争闘』93、94。

『The Great Controversy』におけるジョン・ウィクリフに関する記述に続いて、ホワイト姉妹は忠実な改革者たち（道しるべ）の一覧を挙げ、その列挙は最終的に改革者ジョ

ン・ノックスにまで及ぶ。彼女は、スコットランド女王メアリーからジョン・ノックスに向けられた重要な問いを取り上げている。

ジョン・ノックスは、教会の伝統や神秘主義に背を向け、神の言葉の真理を糧とし、ウィシャートの教えは、ローマ教会との交わりを捨てて迫害されている改革者たちに加わろうとする彼の決意を確固たるものにした……

多くのプロテスタントの指導者たちが、その面前では熱意をそがれたスコットランドの女王と対面させられたとき、ジョン・ノックスは真理のために揺るぎない証しを立てた。彼は甘言に靡かず、脅しにも怯まなかった。女王は彼を異端として訴えた。彼は国家が禁じた宗教を受け入れるよう民衆に教えたのだ、と彼女は言い、そうすることで、臣下は君主に従うべしと命じる神の戒めに背いたのだと主張した。ノックスはきっぱりと答えた——『正しい宗教は、その起源も権威も君主からではなく、永遠の神のみに由来するのだから、臣下が自分の宗教を君主の好みに合わせて形作る義務はない。というのも、しばしば君主こそが誰よりも神のまことの宗教に無知だからである。アブラハムの子孫が、長らくその臣下であったファラオの宗教に皆従っていたならば、この世にいかなる宗教があったでしょうか、陛下。さらに、使徒たちの時代に、すべての者がローマ皇帝の宗教に従っていたならば、今この地上にどのような宗教があったでしょうか、陛下。……ですから、陛下、臣下には君主を敬うことが命じられてはいても、君主の宗教に従う義務はないのだとお分かりいただけるでしょう。』

メアリーは言った。「あなたは聖書のある仕方では解釈し、彼ら〔ローマ・カトリックの教師たち〕は別の仕方では解釈します。私は誰を信じればよいのでしょうか。誰が裁き手となるのでしょうか？」

「御言葉のうちに明白に語っておられる神を信じなさい」と改革者は答えた。「そして、御言葉があなたがたに教えるところを超えては、どちらの言い分も信じてはならない。神の御言葉それ自体は明瞭であり、もしどこか一箇所に曖昧さがあるとしても、決してご自身に反することのない聖霊が、他の箇所でそれをさらに明らかにしてください。ゆえに、頑迷に無知であり続ける者にのみ、疑いが残りうるにすぎないのだ。」恐れを知らぬ改革者は、命がけで、このような真理を王の耳に語った。同じ不屈の勇気をもって彼は志を貫き、祈りつつ主の戦いを戦い抜き、ついにスコットランドは教皇制から解放された。『大いなる論争』250、251。

改革者と女王のやり取りは、宗教改革の歴史における第三の主題を浮き彫りにしている。すなわち、サタンが聖書と改革者たち、そして聖書研究の方法論に対して偽の代用品を作り上げようとする企てを明らかにする主題である。ジョンの女王への答えは、正しい方法論は「歴史主義」であり、それは聖霊が別の預言的歴史の筋道によって一つの預言的歴史の筋道を説明するという前提に立つ、というものであった。

暗闇の中に光がもたらされた。ウィクリフや初期の改革者たち、そしてミラー派の歴史に至るまで、彼らは「歴史主義」と呼ばれる聖書研究の方法を用いていた。聖書的な聖書研究の方法の歴史はしばしば見落とされるが、ミラーが採用し、その後フューチャー・フォー・アメリカが採用した予言解釈の規則の意義を真に理解するためには、その歴史を認識することが不可欠である。

ホワイト姉妹が神に定められた民と認める教会は二つしかない。すなわち、古代イスラエルとセブンスデー・アドベンチスト教会である。

「私たちが神の民と呼ばれる理由は、繰り返し繰り返し語られるべきである。申命記4章1-13節」『Manuscript Releases』第8巻、426頁。

使徒時代の教会も、教皇制の暗黒時代に荒野にあった教会も、「神に名づけられた民」とは決して呼ばれなかった。というのも、その用語（「名づけられる」という意味）は、神の律法をゆだねられ、その保管者となる責任を与えられた教会を指しており、さらにアドベンチズムにおいては、神の預言的真理の保管者でもあることが求められたからである。

神はこの時代に、古代イスラエルをお召しになったと同様に、ご自分の教会を地上にあって光として立たせるよう召された。真理という力強い大なた、すなわち第一、第二、第三の天使のメッセージによって、神は彼らをご自身の聖なる御もとに引き寄せるために、彼らを諸教会およびこの世から分離された。彼は彼らを御自分の律法の保管者とし、この時のための大いなる預言の真理を彼らに委ねられた。古代イスラエルに委ねられた聖なる神託と同様に、これらは世界に伝えるべき聖なる委託である。黙示録14章の三天使は、神のメッセージの光を受け入れ、地の隅々に至るまで警告を響かせるために神の使者として出て行く人々を表している。『証言』第5巻、455頁。

ウィリアム・ミラーは、神の預言の真理を開くために選ばれた使者であった。そして、その真理が1844年に人々を至聖所への開かれた戸へと導いたとき、神はさらに神の律法を開示された。ウィクリフは、聖書を開き宗教改革の端緒を生み出すうえでの道標であるが、同時に「預言の大いなる真理」を確立するという神の働きにおける道標でもある。ジョン・ウィクリフは、教皇制の1260年間の支配の歴史において「明けの明星」と呼ばれる存在であった。彼の働きは14世紀に始まり、その後17世紀には、その預言的系譜における別の道標として、1611年の欽定訳聖書の刊行があった。その線上で、最終的にミラーの預言解釈の規則という道標に行き着く。ミラーはその真理の系譜における道標であり、彼の規則もまた同様である。彼の規則は、『Prophetic Keys』の刊行によって表されるアドベンチズムの終わりにある道標を証ししている。

もし私たちが、ミラーの規則が、聖書本文の原初にして正確な形を保存する働きと、聖書の真の理解を開示する働きとを表す預言史の系譜における道しるべであったこと、そしてそのためには改革者たちが「歴史主義」と呼ばれる聖なる研究方法論を理解し、それをを用いるように導かれる必要があったことを理解していないなら、私たちは、アドベンチズムの終わりにおいて第三天使の光を提示し保存する働きに関わる預言的真理を識別するために必要な情報を欠くことになる。このため、その歴史の系譜を簡単に概観しておくことが重要である。

「プロテスタント」という語の唯一の真の定義は、ローマに抗議することである。教会がローマへの抗議をやめるなら、それはもはやプロテスタントではなくなり、第一の天使のメッセージを退けたプロテスタントがそうであったように、ローマの娘となる。カトリック教会から出てきたプロテスタントの「標語」となった最重要の理解は、「聖書、ただ聖書のみ」であった。だが歴史は、聖書が正しく分けて解き明かされる必要があったと

いう事実を証言している。

神に認められる者として自分を示すため、恥じるところのない働き人として、真理のことばを正しく扱うよう努めなさい。しかし、俗悪でむなしいおしゃべりを避けなさい。そうしたことは、ますます不敬虔に進ませるからです。テモテへの手紙第二章15、16節。

プロテスタントが、真理の言葉を正しく取り扱おうと努める中で用いるよう導かれた聖書研究の方法は「歴史主義」である。その方法は、サタンが攻撃するための明確で重大な標的となり、彼は実際にそれを攻撃した。

「私たちは自ら、キリスト教の本質は何か、真理とは何か、私たちが受けた信仰とは何か、聖書の規則-最高の権威から私たちに与えられた規則-とは何かを知っておくべきである。」『1888年資料』403頁。

宗教改革者たちからウィリアム・ミラーに至るまでが用いた聖書解釈の方法論を掘り崩す動きは、イエズス会の学者フランシスコ・リベラ（1537～1591）によって15世紀に始まったものと具体的に指摘されている。彼は未来主義的解釈を普及させたとされる。彼はヨハネの黙示録に注解書を著し、予言を歴史的な文脈から切り離す未来主義的解釈を提案した。リベラは、歴史主義の方法論が常に導き出していた真理に抵抗する目的で、この方法論を作り出した。その真理とは、ローマ教皇こそが聖書の預言における反キリストである、ということだった。

17世紀から18世紀にかけて、プロテスタントがリベラの誤った方法論を悪魔的で不健全なものとして認識していたことは、文献によって裏づけられる。当時のプロテスタントたちは、そのイエズス会の学者の「俗悪でむなしいおしゃべり」に反対する書物や小冊子を著した。ところが1909年、「トロイの木馬」であるスコフィールド・リファレンス・バイブルが刊行され、その聖書の脚注に挿入された参照事項は、リベラおよびマヌエル・ラクンサ（1731-1801）という別のイエズス会士の教えに基づいていた。ラクンサはフアン・ホサファト・ベン＝エズラという筆名で執筆し、「栄光と威厳のうちに来られるメシアの来臨」という題の書を出版した。彼に先んじたリベラと同様に、その書は『ヨハネの黙示録』の預言の成就に対する直接的な攻撃であった。

サタンは、自分が混乱で覆い隠す必要があるメッセージが、黙示録に由来する最後の警告のメッセージであることを知っていた。二人のイエズス会の神父による不敬でむなしい空談をスコフィールド・リファレンス・バイブルの参照箇所に取り込むことで、サタンは背教したプロテスタントをイエズス会の手法を受け入れるように導き、こうして彼らに真理が見えないようにした。サタンは、聖書の預言における反キリストが誰であるかを明確に特定する余地を取り除く、いくつかのカトリックの預言モデルを導入することによって、それを成し遂げた。プロテスタントはすでに1843年にミラーのメッセージを拒否することでローマ教会へと戻っていたため、それはサタンにとって難しい欺きではなかった。

キリストが十字架にかけられた後の最初の数世紀に始まった聖書へのサタンの攻撃を記録した書籍や記事が、長年にわたりいくつも刊行されてきた。その攻撃は、偽の聖書を作

り出すための偽写本が流通するようにさえなった。サタンはまた、神の言葉を擁護するために立てられた宗教改革者たちを、彼らが活着している間も、さらには彼らの死後でさえ攻撃した。

現代のセブンスデー・アドベンチストの歴史家や神学者がウィリアム・ミラーという人物をどう扱っているか、考えてみてください。まるで彼らが彼の遺骨を掘り起こしてミシシッピ川に投げ捨てたかのようです。

ウィリアム・ミラーはサタンの王国をかき乱しており、この大敵はそのメッセージの効果を打ち消すだけでなく、使者その人をも滅ぼそうとした。ミラー父が聖書の真理を聞き手の心に実際的に適用して語ると、自らをクリスチャンと称する者たちの憤りが彼に対して燃え上がった。ちょうどかつてユダヤ人の怒りがキリストとその使徒たちに対してかき立てられたのと同じである。教会員たちは下劣な階層の人々を扇動し、集会の場所を去ろうとする彼の命を奪おうと、敵はしばしば陰謀をめぐらした。しかし聖なる天使たちが群衆の中におり、その一人が人の姿をとって主のしもべである彼の腕を取り、怒れる暴徒の中から彼を安全に導き出した。彼の働きはまだ終わっておらず、サタンとその手先どもは目的を挫かれた。『預言の霊』第4巻、219頁。

アドベンチズムにおける同じ二つのカテゴリー（神学者と歴史家）が、ホワイト姉妹が三天使のメッセージを実際に宣べ伝えるすべての者によって用いられると私たちに告げているミラーの規則の妥当性を、どのように過小評価し、隠蔽してきたかを見てください。

第三天使のメッセージを宣べ伝える働きに従事している人々は、ミラー師が採用したのと同じ方法で聖書を調べている。『預言と預言年代学に関する見解』と題する小冊子の中で、ミラー師は聖書研究と解釈のための、次のような簡単ではあるが理にかなった重要な規則を示している：

[規則1から5を引用。]

上記はこれらの規則の一部であり、私たちの聖書研究においては、ここで示された原則に留意するのがよいだろう。Review and Herald, 1884年11月25日。

神の言葉の発展と確立に関連する預言的歴史の系譜における三つの流れを検討しないなら、ウィリアム・ミラーを、メッセージの提示においてはエリヤに象徴された使者として、義人の復活においてミラーが起こされるとの約束においてはモーセとして、また自らの農場を離れてエリヤのメッセージに仕えることをいとわなかった点ではエリヤとして支持する重要な証言の意義を理解することはできない。ホワイト姉妹は、これら三人すべての聖書の英雄がウィリアム・ミラーを象徴していると述べているが、現代のアドベンチストの神学者や歴史家は、彼をまるで18世紀の単なる「貧しい農家の少年」であったかのように扱っている。

ウィリアム・ティンダルは、この預言的歴史の流れの中で立てられた多くの改革者の一人であった。こう言ってよければ、彼が相対した教皇の使節たちに対して掲げた彼の「使命宣言」は、「私は、すきを操る少年に、あなたよりも聖書について多く知るようにさせる」というものだった。ウィリアム・ミラーは、そのすきを操る農家の少年であり、テ

インダルの予言を成就した。

これまで提示してきた内容を裏づけるために引き合いに出しうる歴史のすべてを考慮すれば、この序論は大幅に簡略化されています。私たちは今、道標および使者としてのミラーの考察へと立ち戻るために、アルファとオメガのいくつかのしるしを検討します。

ダニエル書は、二つの書物から成る一つの書の始まりである。その書の終わりはヨハネの黙示録である。両者は別個の書であるが、合わせると一つの書を成している。

何年も前、私は、セブンスデー・アドベンチスト教会総会の聖書研究所で働いていた著名なセブンスデー・アドベンチストの神学者と、公の場でやり取りをしたことがある。その神学者は、ダニエル書11章の最後の6節についての私の理解、そしてダニエル書における「daily」に関する私の理解を正そうとしていた。私たちのやり取りはしばらくの期間にわたって続き、彼が記事を発表し、それに私が応答し、彼がさらに返答し、そしてもちろん私もまた考えを返す、といった具合であった。その過程で彼は、総会で自分が所属している委員会では、自分はダニエル書の専門家と見なされ、同僚の一人がヨハネの黙示録の担当専門家と見なされているのだと私に告げた。やり取りの中で彼は、黙示録に関する論点は自分では扱わず同僚に委ねたいと言い、議論をダニエル書に限定したがっていた。

ホワイ夫人は、ダニエル書と黙示録は一つの書であるとはっきり述べている。そのレベルでは、それらは聖書を表している。聖書は旧約と新約という二つの書から成る一つの書である。ホワイ夫人はまた、旧約のみを唯一の書とみなすユダヤ教についても、そして新約だけを理解する、あるいは理解しようとして旧約を軽視する者たちについても言及している。彼女の靈感による証しは、新約だけを受け入れるなら旧約を拒むことになり、その逆もまた同様である、というものである。神学者が自分はダニエル書の専門家だが黙示録の専門家ではないと主張することは、旧約聖書のみを受け入れるというユダヤ教的な考えを繰り返すことにほかならない。そして、その狭い見方がユダヤ人をどこへ導いたかを私たちは知っている。この問題でどちらか一方に与すること、すなわち旧約を受け入れて新約を受け入れない、あるいは新約を受け入れて旧約を受け入れないというのは、証し全体を拒むことに等しい。

救い主は弟子たちに、これらのことがわかったかとお尋ねになった。彼らは、「はい、主よ」と答えた。すると彼は彼らに言われた。「それゆえ、天の御国について教えられた学者はみな、自分の倉から新しい物も古い物も取り出す家の主人のようなものである。」このたとえで、イエスは、ご自身から受けた光を世に与えることを務めとする者の責任を、弟子たちの前に示された。当時存在していた聖書は旧約だけであったが、それは古代の人々のためだけに書かれたのではなく、すべての時代、すべての人々のためのものであった。イエスは、ご自身の教えを伝える教師たちに、預言において告げ知らされたメシアとしてのご自身の身元を確認し、世に対するご自身の使命の性質を明らかにする光を求めて、旧約を熱心に探ることを望まれた。旧約と新約は切り離すことができない。両者ともキリストの教えだからである。旧約だけを受け入れるユダヤ人の教理は救いに至らない。律法と預言の成就であった救い主を退けているからである。また、旧約を捨てる者たちの教理も救いに至らない。なぜなら、それはキリストについての直接の証しを退けるからである。懐疑者はまず旧約を軽んじること

から始め、次の一步で新約の正当性も否定し、こうして両方とも退けられてしまう。

ユダヤ人は、安息日の拘束力を持つ律法を含む戒めの重要性を、キリスト教世界に示すうえでほとんど影響力を持たない。というのも、古い真理の宝を取り出すとき、イエスご自身の教えにある新しいものを脇へ退けてしまうからである。これに対して、キリスト教徒が、キリストの教えを神の知恵の言葉としてユダヤ人に受け入れさせることに失敗する最大の理由は、御言葉の宝を取り出す際に、旧約聖書の富を侮り、軽んじるからである。旧約は、モーセを通して語られた神の子の初期の教えである。彼らは、シナイで布告された律法と、エデンの園で制定された第四戒の安息日を退けている。しかし、キリストの教えに従う福音の奉仕者は、旧約と新約の双方について徹底した知識を身につけ、それらを本来の光のもとで人々に示すであろう。それらは切り離すことのできない一体であり、一方が他方に依存し、また他方を照らし出すのである。こうして、イエスが弟子たちに教えられたように、彼らは自分の宝の蔵から「新しいものと古いもの」を取り出すのである。『預言の霊』第2巻、255頁。

先の勧告には、ラオデキア的なアドベンチストに関しても別の当てはめ方がある。旧約と新約を含む聖書全体を信じると公言しながら、預言の霊を退けることは、ただ一つの証言だけを受け入れるというのと同じ落とし穴である。真理を確立するには二人の証人が必要であるから、一人の証人では真理を確立することは不可能であり、もしそれをしようとするなら、彼らは二人の証人の双方を拒んでいることになり、いわゆる「半分の真理」に自分の信仰の土台を置いているのである。

これから、2023年7月以降に発表されてきた初期の記事の一つに載っていた質問を繰り返します。質問はこうです。「1863年以降、アドベンチズムからどんな新しい光が出てきたのか？」答えは単純に「何もない」。

ダニエル書と黙示録は一つである。一方は預言で、他方は啓示である。一方は封印された書で、他方は開かれた書である。ヨハネは雷が語った奥義を聞いたが、それを書き記してはならないと命じられた。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻、971。

したがって、アルファとオメガは、ダニエル書が最初で、ヨハネの黙示録が最後であることを示している。ダニエル書はアドベンチズムの始まりを、ヨハネの黙示録はその終わりを表している。

「黙示録は封印された書であるが、同時に開かれた書でもある。それには、この地球の歴史の最後の日々に起こるであろう驚くべき出来事が記録されている。この書の教えは明確であって、神秘的で不可解なものではない。その中では、ダニエル書と同じ系統の預言が取り上げられている。神はいくつかの預言を繰り返しておられ、それによってそれらが重んじられるべきものであることを示しておられる。主は重要でない事柄を繰り返されることはない。」Manuscript Releases, 第9巻, 8.

アドベンチズムの始まりに、1798年に封印が解かれ、アドベンチズムの中核となるまさにその聖句において、イエスはご自身を「パルモニ」-「不思議に数を定める方」と名乗られた。アドベンチズムの終わりに、イエスはご自身を「アルファとオメガ」-驚くべき言葉の達人、すなわち神のことばとして名乗られる。このゆえに、アドベンチズムの始ま

りと第一の天使のメッセージは「時にかかっていた」。アドベンチズムの終わりには、第三の天使のメッセージは「その御言葉にかかる」。

アドベンチズムの始まりと終わりは、聖書の預言における第六の王国の歴史の中で起こる。ゆえにそれらは、アメリカ合衆国の始まりと終わりの時期に起こる。アメリカ合衆国の預言的歴史とは、共和主義とプロテスタンティズムという二本の角の歴史である。その歴史が結末に至るとき、その二本の角は小羊から竜へと変わっているだろう。共和主義は民主主義へと変わり、プロテスタンティズムは背教的プロテスタンティズムへと変わる。アメリカ合衆国に対する猶予の時の杯が、まさに今起こっているとおり、終わりに近づき始めるとき、背教的共和主義と背教的プロテスタンティズムという二本の角は獣の像をつくり、こうして教会と国家を融合させ、竜のように語る一本の角とする。だが神はご自身の証人を欠くことはない。というのも、アメリカ合衆国に結末をもたらす過程において、神は真のプロテスタンティズムの角を起こし、アメリカ合衆国における獣の像に対して、さらにはその後、全世界に立ちのぼる獣の像に対しても抗議させるからである。アメリカ合衆国の終わりにおけるプロテスタンティズムの角の興起は、アメリカ合衆国の始まりにプロテスタンティズムの角が起こされたのと同じ歴史的構造の中で成し遂げられる。かつての契約の民は退けられ、新しい民が新しい契約の民となる。日の下に新しいものは何もない。

ミラー派の歴史において理解され、提示された時の預言を用いてアルファとオメガを評価すると、両者はまったく同一であることが分かる。すべての時の預言は、その預言が宣言される時の歴史から始まり、その歴史は、預言が成就する時の歴史を常に型として示す。

二千三百年の預言の歴史は、紀元前457年の第三の勅令をもって始まり、1844年10月22日の第三天使のメッセージをもって終わった。第三の勅令が発布される前に、神殿とエルサレムの再建の働きは成し遂げられていた。同様に、第三天使が到来するに至る歴史において、ミラー派の神殿の基礎的な真理が確立された。

紀元前723年に北の十部族の離散をもって始まった2520年の予言は、1798年に成就した。この予言は二つの1260年の期間を示しており、最初は実際の異教ローマによる実際の神殿とエルサレムの踏みにじりを画し、その後に教皇ローマが霊的な都と神殿を踏みにじる1260年が続く。予言は北王国の滅亡とその国民の離散から始まった。予言の中間点である538年は、聖書の予言における第四の王国である異教ローマによる神の民の踏みにじりの終わりを画し、暗黒時代の荒野へと神の教会の離散をもたらした。1798年にその時の予言が終わることは、聖書の予言における第五の王国の終わりを画する。北の十部族の離散と、荒野へと逃れたキリスト教会の離散は、プロテスタントの角となるべく定められた者たちの結集を表している。道標はしばしば反対の事柄によって表され、離散が集合を表すこともある。ちょうどエリヤがバプテスマのヨハネを表すように。同じ予言的な対決において、エリヤは死なず、バプテスマのヨハネは死ぬ。

紀元前677年、（聖書では「栄光の地」とも呼ばれる）南王国ユダは二千五百二十年間散らされ、その期間は1844年10月22日に終わった。その予言は、神の民が踏みにじられることを示しており、ダニエル書8章13、14節でダニエルが「軍勢」と呼ぶ者たちを指してい

る。

そのとき、私は一人の聖なる者が語るのを聞いた。すると別の聖なる者が、語っていたその聖なる者に言った。「常の献げ物に関する幻と、荒廃をもたらす背きによって聖所も軍勢も踏みにじられることは、いつまで続くのですか。」そして彼は私に言った。「二千三百日までである。その後、聖所は清められる。」ダニエル書 8章13、14節。

紀元前677年に始まった2520年の預言と同時に終結した2300年の預言は、ダニエル書8章13、14節に記されている聖所の踏みにじりを指し示していた。紀元前677年のユダの散らしに関する預言の前にはネブカドネザルによる三度の攻撃があり、その預言は1844年10月22日に第三のメッセージが到来したときに終わった。

1798年と1844年にそれぞれ終わる二つの2520年の預言は、ミラー派の神殿の基礎を築く46年間を指し示している。モーセは神殿建設の指示を受けるのに46日を費やし、キリストの時代のヘロデによる神殿の改修は46年を要し、それはキリストの洗礼の年に終わった。洗礼の後、彼は荒野へ40日の間赴き、戻ると最初に神殿を清め、難癖をつけるユダヤ人たちは、彼がそのようなことをどんな権威によって行ったのかを問いただした。

ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムへ上った。神殿の中で、牛や羊や鳩を売る者たちと、両替人が座っているのを見つけた。イエスは細い縄でむちを作り、羊も牛もろとも彼らをみな神殿から追い出し、両替人の金をまき散らし、台をひっくり返した。そして鳩を売る者たちに言った、「これらをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家にしてはならない。」弟子たちは、「あなたの家への熱心が、わたしを食い尽くした」と書いてあるのを思い出した。するとユダヤ人たちは彼に答えて言った、「あなたがこんなことをしているのだから、どんなしるしを私たちに見せるのか。」イエスは答えて言った、「この神殿をこわしてみなさい。わたしは三日でそれを建て直す。」ユダヤ人たちは言った、「この神殿は建てるのに四十六年かかったのに、あなたは三日でそれを建てるのか。」しかし、イエスはご自分のからだという神殿のことを言っていた。そこで、イエスが死者の中からよみがえったとき、弟子たちはイエスがこのことを言っていたのを思い出し、聖書とイエスの語ったことばを信じた。ヨハネの福音書 2章13-22節。

ミラー派の神殿は、第一の二千五百二十年の預言が終結した1798年からの46年間で建て上げられ、46年後、1844年に第二の二千五百二十年の預言が成就した時に終わりを迎えた。その46年は第一の天使の到来で始まり、第三の天使の到来で終わった。というのも、キリストはご自身の神殿は三日で建て起こされると言われたからである。あなたがこれらの事実を見ることを拒むのは、従おうとせず回心していない心に起こり得る問題とは別に、主として二つの問題があるからである。第一は、歴史は繰り返すという視点から預言の言葉に向き合おうとしないこと、すなわちあなたが歴史主義者ではないことである。もう一つは、神の言葉の中に記された象徴的な語を、神の言葉によって適用することができないことである。これらすべての預言の始まりは終わりを指し示し、しかもそれらは単なる繰り返される歴史以上のはるかに多くのことを常に指し示している。

聖書は、私たちの体は聖霊の宮であり、その体という宮は46本の染色体から成り立っていると述べています。これら46本の染色体を研究する科学者たちは、男性の23本の染色体

と女性の23本の染色体が、十字架の形をしたタンパク質に巻き付いていると私たちに伝えてくれます。

ダニエル書12章には、相互に関連した三つの期間に関する預言がある。最初のもは、聖なる民の力が散らされることを指しており、これはレビ記26章の「七つの時」を表している。彼らによって成就された聖なる民の力の散らしは二千五百二十年であったが、ダニエル書12章ではその期間の後半だけが言及されている。それは、ダニエルがその宣言の意味を理解していなかった様子を描いている。

そして、私は亜麻布を身にまとい、川の水の上にいるその人が、右の手と左の手を天に挙げ、永遠に生きておられる方に誓って、「それは一つの時と二つの時と半時であり、聖なる民の力を打ち散らすことが成し遂げられるとき、これらすべての事が終わる」と言うのを聞いた。私は聞いたが、理解できなかった。そこで私は言った、「わが主よ、これらの事の終わりはどのようになるのでしょうか。」ダニエル書12章7節、8節

ダニエル書12章は、終わりの時に封印が解かれるメッセージを示しており、その終わりの時は1798年であった。その箇所では、ダニエルはウィリアム・ミラーを表しており、彼はその歴史における賢い者の主要な象徴である。ミラーはまずレビ記26章の2520年の預言へと導かれ、7節と8節では、2520年に及ぶ離散がまさしく神がご自身の民を散らされたこととして特定されているという真理を調和させなければならない賢い者を彼が表している。

それでもなお、これらすべてにもかかわらず、あなたがたがわたしに聞き従わないなら、わたしはあなたがたの罪のゆえに、さらに七倍あなたがたを懲らしめる。わたしはあなたがたの誇る力を打ち砕き、あなたがたの天を鉄のようにし、あなたがたの地を青銅のようにする。レビ記 26:18、19。

古代イスラエルの「高慢」とは、神を自分たちの王として退け、人間の王を選ぶことを許されたときのことだった。彼らの高慢（箴言16:18の「転落を妨げるもの」）は、周囲の偶像礼拝の諸王国のようになりたいという願望であった。まず北王国が、そして次に南王国が取り去られたことは、それぞれ紀元前723年と紀元前677年に、力（王）が散らされたことを意味していた。

ミラーは、ダニエル書12章の前の節々で封印が解かれて知識が増し加わることを理解した賢い者たちを代表しており、7節と8節では、神の民の散らしに関わる千二百六十年と二千五百二十年の関連を理解していない者として描かれている。ダニエルはアドベント主義の終わりにおける神の民を、ミラーはアドベント主義の始まりにおける神の民をそれぞれ表している。アドベント主義の終わりにおいても同じジレンマが存在する。というのも、アドベント主義は「七つの時」に関するミラーの理解を退けたため、千二百六十年だけを暗黒時代として特定するほかなくなつたからである。終わりの賢い者たちも、ダニエルとミラーが示すように、同様の問題を解決しなければならなかつた。なぜレビ記26章の用語が、七つの時ではなく三年半を示すために用いられるのか。

ミラーはこのジレンマを完全に解決することはなかつたが、1856年、最後の「新しい預言的な光」が提示された。それは、完結しなかつた6回連載の記事の中で、「七つの時」

を、異教ローマが神の文字どおりのイスラエルを踏みにじった三年半と、その後に教皇ローマが霊的イスラエルを踏みにじった三年半とを表すものと特定していた。7年後、アドベンチズムは「七つの時」の光をすべて全面的に退け、こうして、終わりの時にあたる1989年に、賢い者たちのためのジレンマが用意された。そのとき、ダニエル書11章40節に記されているとおり、旧ソ連を代表する諸国は教皇庁とアメリカ合衆国によって押し流された。

ミラーに与えられた最初の光は1863年に退けられ、その主題に関する最後の光は、あの六編の記事の中でハイラム・エドソンによって与えられた。これらの記事は打ち切られ、七年（時）後には、数年前に正しく「バビロンの娘たち」と特定されていた偶像礼拝の諸教会を模倣するために、現代イスラエルの力は棚上げにされた。予言的教理としてのレビ記26章の「七つの時」はつまずきの石となり、サウルを王として自分たちを治めさせたいという願望に表れている古代イスラエルの高慢が繰り返された。イエスは初めをもって終わりを表す。

ダニエル書はまた、508年に「the daily」が取り去られた時に始まる1290年の預言と1335年の預言を示している。「the daily」の取り去りは、538年における教皇権の台頭に対する異教ローマの抵抗が取り除かれることを表している。538年に教皇権が地上の王座に据えられる前には30年間の移行期間があり、その後の1260年は1798年に終わる。一つの王国から次の王国へのこの30年の移行は、1798年に聖書預言の第六の王国が地上の王座に据えられるに至る教皇支配の最後の数年間を示している。1290年の預言の始まりは、聖書預言における一つの王国から次の王国への移行を示しており、その預言の終わりもまた同様である。

508年に「the daily」が取り除かれたときに始まった1335年間の預言は1843年に終わる。

日ごとのいけにえが取り除かれ、荒廃をもたらす忌むべきものが据えられる時から、千二百九十日がある。待ち続け、千三百三十五日に至る者は幸いである。ダニエル書 12:11, 12.

千三百三十五年にわたる預言は1843年に終わり、ダニエルは、その預言が成就するのを「待っていた」者たちは祝福されると言っている。ホワイト姉妹はこのように言っている

1843年と1844年に見られたものを見た者の目は幸いである。

「そのメッセージは与えられた。そして、時のしるしが成就しつつあるゆえに、そのメッセージを繰り返して伝えることに遅れがあってはならない。終結の働きは成し遂げられなければならない。大いなる働きが短期間に行われるであろう。まもなく、神の定めにより、大いなる叫びへと膨れ上がるメッセージが与えられるであろう。そのとき、ダニエルは自分の分に立って、証しをするであろう。」原稿公刊集 第21巻 437頁。

したがって、千三百三十五年の予言の起点は、異教から教皇制への宗教的転換を指し示しており、ひいてはプロテスタンティズムからミラー派プロテスタンティズムへの転換も指し示している。

アドベンチズムの基礎的真理を拒むアドベンチストたちは、ミラー派が提示したすべての時の預言、ダニエル書8章14節の二千三百年でさえも拒んでいる。彼らはこの事実を否定するかもしれないが、それが事実であることは論理的に示すことができる。しかし今の私の論点は別なので、この記事は結論に導こうとしている今はその点には立ち入らないでおく。

紀元前677年にユダの「栄光の地」が散らされたことは、ダニエル書8章13、14節に記されている「軍勢」の踏みにじりを表し、現代の「栄光の地」であるアメリカ合衆国の成立を指し示している。同じ節にある二千三百年は紀元前457年に始まり、「聖所」の踏みにじりを表している。

そのとき、私は一人の聖なる者が語るのを聞いた。すると別の聖なる者が、語っていたその聖なる者に言った。「常の献げ物に関する幻と、荒廃をもたらす背きによって聖所も軍勢も踏みにじられることは、いつまで続くのですか。」そして彼は私に言った。「二千三百日までである。その後、聖所は清められる。」ダニエル書 8章13、14節。

紀元前677年と紀元前457年は、神の民と神の聖所の関係によって結び付けられている年である。神は1844年10月22日に、民と聖所の双方を同時に再び結び合わせた。紀元前677年から紀元前457年までの二百二十年間は、光の増大を示す道標を神が立てられる時期を象徴している。1844年10月22日には、第三の天使の光が到来し、聖所の光が輝き始め、その光を告げ知らせる民がそこにいた。

サタンとキリストが繰り広げた三重の戦いを明らかにする預言的な系譜の中で、1611年の欽定訳聖書が刊行された。そのちょうど220年後の1831年、ウィリアム・ミラーが初めて自らのメッセージを発表した：

「9年間、ウィリアム・ミラーは、自らのメッセージを諸教会に伝えるべきだと確信していた。しかし、間もなく来られる救い主の喜ばしい知らせを、何らかの公に認められた権威者が告げてくれることを望んで、彼は待ち続けた。こうして待つことで、彼はそのメッセージの真実性を証明したにすぎなかった。彼らには生きていたという名はあったが、実際には急速に死にかけていた。1831年、ミラーは預言に関する最初の説教を行った。」 スティーブン・ハスケル『パトモスの先見者』77頁。

神は、聖書を作り上げるために用いられた神聖で正確な原典を守られた。そして1611年に、ご自身の聖書を世に与えられた。その後、聖書の中に見いだされ、導き出され、確立された規則を用いて第一の天使のメッセージを生み出す使者を起こされた。1831年には、ミラーのメッセージは、キリストの歴史においてバプテスマのヨハネによってメッセージが正式に確立されたのと同様に、またあらゆる改革運動においてメッセージが正式に確立されてきたのと同様に、正式に確立された。裁きの開始を告げる第一の天使のメッセージであるミラーのメッセージは、二百二十年という預言的期間の適用によって直接に裏づけられている。それは、聖書の預言における第六の王国-アメリカ合衆国-の始まりにおける警告のメッセージであった。

1996年、「Future for America」の働きが始まり、1989年に封印が解かれていた第三天使のメッセージ、すなわち教皇制の致命的な傷の癒しと間もなく到来する日曜法を指し示すメッセージが、『The Time of the End』という題の雑誌に発表された。アドベンチ

ズムの終わりにおけるメッセージは、始まりのメッセージが体系化されたのと同様に、体系化されていた。始まりには、そのメッセージは時の枠組みに基づいており、神の言葉に含まれる真理のさらなる発展を表していた。1996年、1776年のアメリカ合衆国の誕生から220年後に、アドベンチズムの終わりのメッセージが体系化され、三天使のメッセージのさらなる発展を表すものとなった。

聖書の預言における第六の王国の歴史において、共和制の角とプロテスタントの角の並行史を論じるにあたり、プロテスタントの角が何を指し、何を指さないのかを理解しておかなければならない。

神に認められる者として自分を示すため、恥じるところのない働き人として、真理のことばを正しく扱うよう努めなさい。しかし、俗悪でむなしいおしゃべりを避けなさい。そうしたことは、ますます不敬虔に進ませるからです。テモテへの手紙第二章15、16節。